

11月17日

修院長ヒルダ

Hilda

(614~680.11.17)

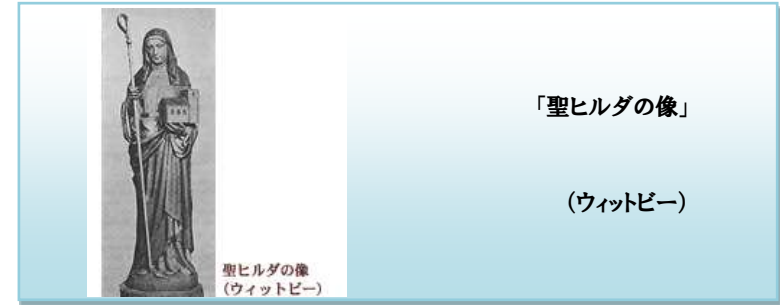
~ホウィットビの女子修院長~

ヒルダは英国のノーサンブリア王家の、エドウィン王の甥の娘として生まれました。そして627年のイースターに、13歳でヨーク司教のパウリーヌスから洗礼を受けました。

それから20年以上がたった649年、ヒルダの姉はパリの近くにあるシェルという場所で修道女をしていました。ヒルダも姉と同じようにシェルに行こうとしますが、司教に呼び戻され、英国のハートルプール修道院長に任命されます。

ヒルダはハートルプールで修道院長生活を送った後、ホウィットビに男女の修道士のための修道院を建てます。このホウィットビ修道院では非常に厳格な規則を設けます。そしてこの修道院は、神学と文学で有名になっていき、ベヴァリのヨアネスや宗教詩人カイドモンといった人物を輩出していきます。

彼女のもとには修道院の壁を超え、彼女を「母」と慕う多くの人たちがやってきました。彼女は王から一般市民にいたるまで、あらゆる人たちの相談をうけていきました。彼女は、自分についてくる人たちには聖書を読む機会を多く与え、また司祭たちには聖書の学びを勧めていきました。



ヒルダがホウィットビで修道院長をしていた664年、ホウィットビ教会会議が開かれます。議題には今のスコットランドに広がっていたケルト教会の慣習、特にケルト教会独自の伝統に従ったものについて、ローマ教会としてどのように対応すべきか、というものがありません。彼女は懸命にケルト教会の慣習を守るために努めました。しかし、会議の決定は彼女の意に反して、ケルト教会の慣習をローマ化するというものでした。しかし彼女は会議の決定を素直に受け入れたそうです。

彼女は七年間の闘病生活ののち、天に召されていきましたが、その日、ハックネスと呼ばれる修道院で、ベグという修道女がヒルダの死を幻視によって見たといわれます。彼女はヒルダが召されたとき、鐘の音を空中に聞き、すべてのものが上からの光で満たされるのを見たと言われています。

<特禱>

全能の神よ、あなたの恵みによって聖霊の愛の炎をその心に燃やした修院長ヒルダは、公会の燃えて輝く光となりました。どうかその信仰と愛によってわたしたちを燃え立たせ、光の子として常にみ前を歩ませて下さい。主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン